

其角『花摘』の舞台

— 亡母追善句日記から蕉門撰集へ —

藤田真一

はじめに

元禄三年（一六九〇）九月十二日、芭蕉は近江の義仲寺から江戸にいる曾良に宛てて、かなり長文の手紙をしたためた。そのなかで、こんな一節が目に残る。

其角、花摘出板のよし、是は前々より段々委細に申聞かせ候。定面面白かるべくと待かね候。

其角が江戸で『花摘』を刊行したという話だが、これについては以前から少しずつ具体的に内容を言ってきたとおり、それから察するに、きつと面白いにちがいないという文面である。同書簡中に、「其角は度々書状さし越、又人々の便にもさた承候」

と告げているところからすると、『花摘』の企画や上梓について、其角本人からなんども連絡があっただけでなく、複数の関係者からもうわさや評判が伝えられてきており、芭蕉の期待感が膨らんでいたのだろうとおもわれる。

『花摘』の記事は、元禄三年の四月八日に始まり、七月十九日で終わっている。また山田筍深による跋文のあとの奥書には、元禄三年の「上秋下旬」、すなわち七月の二十日過ぎの日付が認められる。初版本の版元は「江府書林西村唄風」とあり、翌八月ころに江戸で上梓されたと想定される。

この時代、原稿全文の完成ののち、版下から版木の制作、さらに校正作業を経て、印刷・製本を実施して配本されるまで、どれくらいの時日を要するのか精確にはわからないものの、芭蕉は、手紙を書いた九月十二日にはもう発刊済みで、そろそろ

手許に届いてもよさそうだと了解していたことが見て取れる。其角の側から発刊の時期を示唆していたかもしれないが、なにより芭蕉じしんの切望する心象をうかがうことができる。

元禄二年の晩春に江戸を離れて、みちのくの大旅行を果たしたのち、京・大津などの上方、もしくは故郷の伊賀周辺を転々としていた芭蕉は、江戸の仲間や門人たちの情報や成果を鶴首する熱い思いがあったと推測される。上方蕉門に身を置いてくり広げる俳諧活動と並行して、奥州旅行以後の蕉門俳諧を言葉げせんと策を練っている芭蕉にとって、江戸蕉門のようすが気にならないわけはなかっただろう。

其角とは相当緊密なやりとりがあったと報じる同じ書通の筆先に、江戸蕉門の両輪のもう一方と目される嵐雪に関しても言及を欠かさない。

嵐雪無事に居候哉。随分無沙汰ものにて、しみじみしたる
状一通もこし不申候。定而俳諧に取込候而の事と存候。集
あみ候由、これにも何事を何にいたし候やら、くわしく承
ず候。

其角からは度々書状が届くとした直前の文面で、おなじ

一つ書びとのなかの一節である。行間からは、其角・嵐雪と併称する意識が、芭蕉にもあったことをにじませるものとなっている。しかも其角の『花摘』と競いあうかのように、嵐雪も「集」（撰集）を編んでいることを芭蕉は承知している。それは『其袋』としか考えられない。だとすると、当年六月の自序、版元は京のかの井筒屋庄兵衛である。七月跋の江戸出版の『花摘』が上方の芭蕉のもとに届いてもいいはずとするなら、それより早く京都版の『其袋』がすでに出来あがり、疾はやうに芭蕉の手許に到来していてふしぎはない。にもかかわらず右の書面によると、入手どころか、撰集のようすすら伝わってこず、どこかいらだちさえ感じられる（みちのく旅行を共にした曾良相手だから、書中に本心を畳みこめたのかもしれない）。

江戸の動向を気にする一方で、芭蕉は上方の諸方に身を置いて、さまざまの俳友や弟子たちと交渉を重ねるかたわら、本腰を入れた撰集の準備に余念がなかった。それこそ、翌元禄四年の初秋に刊行される『猿蓑』にはかならない。俳諧史上画期的と評されることになる撰集である。

こうしてみると、東西呼応するかのようには、蕉門は相前後して、活動の集大成ともいふべき俳諧撰集の編集・出版を目ざしていたのだ。二十一世紀のように電話もメールもない時代、上

方・関東にとどまらず、全国を巻き込んだ撰集の実現をするのは並大抵のことではなかったろう。それを次つぎにやってみせようとしている、それがこのころの高揚した蕉門の実勢だったともみられる。本稿では、東西を包み込んだ蕉門の趨勢を確認しながら、これを実現した芭蕉を中心とする一門の息づかいを感じ取ることを目標とする。

一 撰集『花摘』の相貌

みちのく旅行を終えた芭蕉が上方にあって、其角が江戸で試みていた撰集がどのようなものとして仕立てられていったのか、あらためて概観を押さえておくことにする。

まず書名である。一般に「花摘」とするが、題簽(中央)は、上巻を「花摘」、下巻を「華つみ」とし、また内題は上巻「花つみ」、下巻「華摘」と、それぞれにやささか表記を異にするものの、実質的な違いは認められない(本稿では「花摘」とする)。半紙本上下二冊、丁数は上巻が二十五、下巻が三十九、行数は半丁八行で、いずれも俳諧撰集として平均的なものである。

版元は、「江府書林 西村頌風版行」とある。すなわち京ではなく、江戸での出版ということになる。序文署名は「一燈札 其

角述」、漢文による跋文は「山田筍深跋」。跋文のあと、つまり奥書に「元禄庚午歳上秋下旬／宝井其角撰」とあって、元禄三年七月二十日過ぎに其角の手によって編集が完結したことを示している。

この撰集を立ち上げるきっかけについては、其角みずからが序文の冒頭に以下のように書いている。

元禄三年の事にや。母の寺に詣^{まぎ}まかりしに、四年過つる春秋も悲しびをもよほすかた多かりければ、思^{おも}ひを是によせて、心ざしを手向侍りしより、彼^か祇公の一とせの日次^{ひな}を発句つかうまつれりし海山の情、雲水のあはれをも、転法輪讚仏乗の道に入とのみおもひなし給ひけん。

其角の母妙務尼は、貞享四年(一六八七)四月八日に亡くなっている(行年五十七)。没後四年にあたる元禄三年(一六八〇)の命日に、其角は墓所の上行寺に詣でた。そのときの一句がこれである。

灌仏や墓にむかへる独言

この「独言」がいかなるものだったのかは書かれていない。だが、湧きあがった亡母への「思ひ」のなかに、撰集『花摘』に関わる発意があったにちがいない。ただし、この思いのみが『花摘』の編集につながったのではなさそうである。

一点は、「祇公の一とせの日次を発句」にするというものである。宗祇には日記体の発句集があった。『俳文学大辞典』では、「宗祇日発句」として掲げられており、古活字版と整版本で出版されたほか、べつに写本も存在するとされる。ただし、「宗祇作」とされるが確証はない」とも説かれており、またどのテキストに接していたのかも不明だが、其角としては宗祇に範を取って、それなりに由緒を求めた試行の心づもりだったのだろう。この志しが取ってつけたものでなかったのは、六月五日の条に、「祇公日次の題をとりあはせて」と前書したうえで、「河簀垣徳利もひたす流哉」という句を詠じていることからうかがえる。

ただし、宗祇の句日記は追悼に関わる課業ではないのだから、亡母追慕と直結するわけではない。一書として成就に至るまでには、さらなる曲折があったとみられる。

いざ我心、朝夕の人のすくなき折く、聊ものにかきつく。
一夏百句にみちたれば、花摘と名付侍る也。

毎日少しずつ発句を書きとめているうちに、ちょうど百句に到達したところで、そこへ「花摘」と名を施したというのだ。こうして区切り（結縁）がついたところで、日々に見聞した作を加えて公刊に供することとしたという。

「一夏百句」という追悼營為がどれほど一般に浸透・普及していたのか、必ずしも明白ではないのだが、古くから「夏安居」、もしくは「一夏安居」と呼ばれる夏の仏事があった。これは、四月十五日から七月十五日までの九十日間に、一定の場所に籠って行なう仏道修行（夏籠）のことをいった。また九十日を百日に延ばして、同様の夏籠を「夏百日」「夏百日程」とすることもあった。これは俳諧で夏の季語にもなっていて、『俳諧をだまき』（元禄四年刊）などに登録され、たとえば蕪村も「夏百日墨もゆがまぬこゝろかな」（蕪村句集）などとよんでいる。そうした夏行を詠句に転じたのが、其角のこの試みだったということになる。亡母追慕という誠信の行と、一日一句という作句活動とが結合してなった成果だとするならば、俳人其角の人となり打ち出すのうってつけの營為だったということもできるだろう。ただし、それがなぜ没後四年めというタイミングであったのかはわからない。

開始が四月八日だったのは、母の命日によるの言うまでも

ないが、それと同時に、その日が釈迦の誕生日にあたることも無縁ではないだろう。この夏安居の行のひとつに、仏教の経文や仏名を书写することがある。夏書^{げがき}という。『日次紀事』の四月八日「灌仏会」の記事のなかに、「男女一夏九句之間、毎日筆法を習ひ、又或は信ずる所の神仏の名号を記す、是を夏書と謂ふ」（原文は漢文）とある。この変形として、夏百日のあいだ、一日一句ずつ詠じ続けると「一夏百句」となる。いずれにしろ、古くからある仏事の夏行を俳諧に組み入れて、俳人の腕の見せ所にしたといつてよい。

さらに、比叡山の戒壇院では、ふだんは女人禁制ながら、この四月八日の仏生会に限って女性の登山を許し、坂本の花摘の社に参詣させたとされる。同様の行事が東寺でもおこなわれたという（『日次紀事』）。また『和訓栞』には、京都の人が四月に比叡山に入って、草花を摘んで持参したともしるされている。其角はそうした風習を承知のうえで、「花摘」の標題を案じたものと考えられる。

其角の『花摘』では、四月八日に開始して、七月十九日に百句をよみ上げている。ただし、六月二十四・二十五日の両日、および七月四・五日の両日、計四日に発句の記録はない。前者のばあいは、六月二十六日に一気に三句を詠じて補填している

ものの、後者ではそうした処置ははかられていない。また、発句ばかりとは限らず、例外的事例ではあるが、付句も一句としているケースがあるようだ（七月一日）。

母の菩提を弔うことをもって始動した企画であるから、仏教がらみの句作や記事が散見するのは当然である。四月八日ばかりではなく、五月、六月、七月の各八日にも、月命日にあたるところから、当日の句は母を思いやる句となっている。たとえば、六月八日は「母の日や又泣出すまは瓜」、七月八日は「文月や産まる、文字も母の恩」などと母に手向ける句を詠じている。

直接的な追慕の句でなくとも、寺社参詣の折の句や、仏僧が詠じた作がいささか目立つようにも思われる。四月十二日は寛永寺詣での句、四月二十五日は天神社へ奉納、六月一日には自作ではないが、済海寺に遊行した沾徳の句、などと、心なしか宗教性のある記事が目につく。

こうした作品の掲載は、本書の発意にもとづくものである。と編者其角の個人的心性の表出として納得のゆくものである。とはいえ、そのような作品ばかりで一集を埋め尽くしたとなると、とても俳諧撰集として公刊に及ぶことにはならないだろう。あくまでも其角個人の内意にとどめおく性質のもので、江戸ばかりか、上方あるいは日本中の不特定の読者の目にさらすべきも

のには至らないだろう。つまり、俳壇的性格をも有する俳諧撰集としてのあり方が問われることになる。いくら切実な思いがこもっているとはいえ、たんに其角の母を思う気持ちだけでは、上方にいる芭蕉も期待しよがなかつたにちがいない。

母の追慕という私的営為が、撰集という拡がりのある社会的共有性に結びつくためには、其角個人の想念を越えて、文学的な普遍性を獲得する仕組みと内容が欠かせないだろう。それはまた、日記といふごく個人的・内向きの作業が、撰集の有する公的特性を生かすことによつて成し遂げられるものともいえる。そのありようへの解明に近づくには、旬日記といふ体裁に深く切り込んで、俳諧撰集としていかに仕立て上げられていったかを読み解くことが要請される。

二 日録の諸相

個人の生活に即した日記という形態と、一門あるいは広域の俳諧活動の集成である撰集という成果とは、本来逆方向を向き合っていると評さないわけにはいかない。それが一書に共存するためにはどんな計らいがなされるのか。

一日ごとの句は、まっさきに其角の自作があげられるのは当

然である。たんに〈日記〉というのであれば、日々の出来事を事実 に即して記録し、ときに感想やコメントを添えるということもなるだろう。それが〈俳旬日記〉ということになると、出来事の記述にのせて、自句を加えるか、一日を過ごした心情吐露を自作の俳句に譲れば相応のかたちになるはずだ。だが、単純に自作の句文を書きならべて事足れりとする其角ではあるまい。『花摘』の内実に分け入って、其角周辺の句作や動向、さらに上方をはじめ、全国にちらばる俳人たちとの応答のようすを瞥見しながら、撰集としてのあり様を探ってみた。

まずは旬日記の典型を確認しておく。先述のとおり、各日付の冒頭に其角作が一句しるされる。発句のみのこともあれば、ときに前書が添えられることもある。母の墓参だったり、寛永寺参詣だったり、また浅草川遣道であったりと、其角個人の動静に沿ったかたちで詠じられるのは、至極当たり前の書きようである。ただときには、事情は不詳ながら、先人の和歌や発句に思いを寄せて句作してみせることもあった。

必ずしも一律ではない日録のなかから、其角みずからの日常がうかがえるような、注目に値する若干の記事を紹介してみよう。

最初にあげるのは、六月四日である。

遊女小むらさきをか、せて、讀このまれしに、

藻の花や絵に書わけてさそふ水 角

小紫とは、明暦ころに名声を上げた江戸・京町の三浦屋抱えの名女郎のことかと推測される。其角がつくった『吉原源氏五十四君』（貞享四年刊）にも、「他の小女郎とは見えぬ風俗、さすがに名あるべし」と讃えられている人物のことだろう。女郎を描いた画者は不明だが、賛句を其角に求めたところが注目される。

六月十六日の条は、後のちまで話題になった発句がしめされる。

ランロキ
怖夢を見て、

切ラレたる夢は誠か蚤の跡

この句がひろく周知されるのは、『去来抄』『先師評』中の芭蕉・去来の対話によってである。去来は、本句を掲げて、「其角は誠に作者にて侍る。わづかにのみの喰つきたる事、たれかかくは謂いつくさんと」と、其角独特の発想と表現を讃えた。それに応えて、芭蕉は、「しかり。かれは定家の卿也。さしてもなき事

を、ことごとくしくいひつらね侍る、ときこへし評に似たり」と述べたという。句意や句評はこれで全うしているとして、留意されるべきは、芭蕉・去来両者の対話がなされたタイミングである（後述）。

つぎは七月一日を見してみる。やや長文の前書によると、「父の煩はしきを、心もとなくまもりゐたるに、いなみがたき会によびたてられて、どうしても断り切れずに出かけたという。父とは医師でありつつ、俳諧にも手を染めて、俳号を東順と名乗った人物である。芭蕉とも交渉があつたとされる（芭蕉「東順伝」）。その体調が思わしくなく、子息の其角が看病にあたっていたところ、よんどころなき事情で句会に臨んだというのだ。そこで「秋といふ風は身にしむ薬哉」という発句を提出し、一折過ぎたところで解放されたとしている。

『花摘』の刊行は、元禄三年八月ころとされているが、問題は上方の芭蕉や去来の手許にいつ届いたかである。元禄三年秋の芭蕉は、七月二十三日に幻住庵を引き払って、いったん大津にうつる。大津から怒誰に宛てた書簡では、八月は湖南にあつて名月を楽しみたいと予告している。それからもしばらくは、大津か膳所（義仲寺）に身を寄せていたようだ。九月二十七日には、堅田から上洛したが、これは日帰りの強行軍だったので、

両者が対面してじっくり話し合うという暇はなかっただろう。その後芭蕉は故郷伊賀へ赴き、十月になってようやく再度京都にやってくる。その直後になされたのが、『猿蓑』に所収されることになる「鶯の羽も」の四吟歌仙である。ここには去来も参加している。十二月までほぼ京に滞在しているので、其角への句評はそのころの対話だった可能性がある。

八月に江戸で出版された『花摘』が上方まで搬送されて、芭蕉や去来に届くには、それなりの日数を要するだろう。これを読みこみ、味わうには、さらに相応の時日を考慮しないとけない。元禄三年の冬期の会話だとすると、十分な日取りをかけた結果ということはできるだろう。かりに去来の発話だとすると、芭蕉の上洛を手ぐすねを引いて待っていたともみなせる。また、翌年刊行されることになる『猿蓑』の編集も始まっていると想定されるので、『花摘』により、江戸蕉門の大立者其角の手腕や存在感を意識したうえで、去来の発言が芭蕉に向けて発せられたとも考えられる。

こうした其角の動静や句風を如実にあらわす記事がある一方、其角以外の作者の作品が数多く掲載されている。そのなかには、芭蕉奥州紀行時の発句や歌仙が見られたり、京の去来の俳文が紹介されたりもする。あるいは句日記の日付がほぼ初夏から初

秋にかかる、およそ三カ月の期間であるにもかかわらず、四季にまたがる句々が入集する。これらの事態は、『花摘』が句日記という個人的営為にとどまらず、この時期全国に広がるとうする蕉門撰集としての体裁と意義を有するに至る眼目にも関わってくる。そこで、右の事柄については次章で考察することにし、ここでは其角の身边に限ったところで考えておきたい。

さて、其角周辺との接触から取り込まれた作品を読む際、ちよつとした注意が必要となるばあいがある。たんに発句が掲載されているだけのものは、一句として読み解けばよいのだが、前書の添えてあるときは、ある種の判断を要することがある。とりあえず五月十一日の一節を掲げてみる。

回郷の比よ、おもひ立て大和めぐりせしに、
春日 和らぐや杉の林も日の光 かしく

以下「在原寺」「大五輪寺」「多武峯」などと大和の名所をあげて、一句ずつよみあげている。言うまでもなく、前書は作者「かしく」の立場で書かれている。多くのばあいは、これと同様とみてよい。当の発句を案じた場面や発意を明示するのが前書の役目だとすると、常識的なありようといつてよい。

ところが、また別のケースも見かけられる。発句の作者とは異なる立場で添えられているとしか見なせない前書である。たとえば開始二日目の四月九日の条に、こんな前書を伴った作がある。

僧釣雪てうせつがかたりけるに、

此里このに后のちますべし桐の花

羽黒はくろ露丸

一見すると理解しにくいようにみえるが、おそらくこういうことだろう。釣雪は京の僧侶で、芭蕉・曾良が羽黒山で歌仙を巻いたときに一座した人物である。²露丸は呂丸とも書き、『奥の細道』では凶司左吉として登場する。

さて、本句の作者露丸は羽黒にあって、釣雪に自作を託したか、預けたかしたのである。そして江戸にやってきた釣雪が其角に出会った際、露丸の句が其角に手渡され、ただちに入集した、それが本句なのではないか。とすると、前書は本来この句に備わったものではなく、其角に伝えられた事情を説明するものということになる。³すなわち、編者其角の露丸発句入手のいきさつを語るものにはかならない。

四月二十三日にあげられるつぎの句も、似たような事例とみ

られる。

伊勢いせよりもたれたるみやげにか、れたり、
我妻がつまの汗あせに成たるもめんかな
久保くぼ柴しば隼はやぶさ

伊勢からの土産というのを誰がもたらしたのかは書かれていない。作者の柴隼本人とも考えられるが、この書き方からすると第三者から渡されたとみるのが適当だろう。いずれにしても、この前書も発句に付けられていたものではなく、何らかの伊勢土産に添えられた発句であった事情を、編集に当って其角が書き添えたとするべきだろう。

前書の多くは詠じられた場所やモノ、ときに季題を書きつけただけの単純なもので、基本的に発句に即したものとみてよいが、ときには右に取り上げたような、編者が作品を手にした場面を思わせる事態が見受けられる。其角という個人に寄りかかった視点が紛れ込んでいるということになるが、『花摘』はこうした多面的な様相に彩られた句々を集成した撰集と認めることができるだろう。本式の撰集としては、やや異例なかたちと言わざるをえない。公私が混ざり合っているようなものだが、ある意味では、それが『花摘』の特性といえるかもしれない。

三 蕉門の東西交流

近世期というのは、もちろん現代とは比較にならないにせよ、相当に交通網が整備され、想像以上にひとの往来が盛んな時代だった。五街道をはじめとする街道筋は言うまでもなく、瀬戸内や西回り・東回りなどの航路も充実、さらには飛脚による郵送も広く展開・発達し、人間の往き来のみならず、通信の便もかなり自在になりつつあった。こうしたヒトやモノの往来があつてこそ、『花摘』という撰集が成立しえたと見てとる必要がある。本章では、その如実ないくつかなの実態を拾いあげてみることにする。

はじめに、近江・膳所藩の重臣であつた曲水（曲翠）に関する記事をたどつてみよう。六月五日の条に曲水の発句が二句紹介される。一句のみ掲げることにする（前書はない）。

夏山や庵を見かけて二曲^り

曲水

句の意味もさることながら、どういうかたちで其角の許に伝えられたのが問題となる。というのは、この前後の曲水の動きを見定めるのは、かなり慎重を要することだからである。一

説に、前年の冬は、江戸にあつたとされるが、そのころは「芭蕉が湖南滞在中、曲翠邸を訪れて」親しくなつたともいわれる（『俳文学大辞典』「曲翠」）。翌元禄三年の三月には、芭蕉の「木のもとに汁も鱈も桜かな」を立句とする三吟歌仙に曲水も一座しており（『ひさご』）、となると膳所の地にあつたのはまちがいない。その後、曲水は伯父菅沼定知の旧庵を改装して、芭蕉に住まわせる準備をしていることを考慮すると、しばらくは近江に居続けたとみてよい。芭蕉がその庵「幻住庵」に入るのは、四月六日のことである。

ところがそれからほどなく、曲水は江戸へ向かつたようである。同年四月の執筆とされる曲水宛（推定）書簡のなかに、隠桂という人物から幻住庵への同居をしつこく迫られて、芭蕉は困惑していることを告げている。その文面に、「高橋殿と内談仕、貴様御留守之内、彼是山庵（幻住庵）人多きも遠慮がましく候間、御無用被成給り候へと断^{をされたまは}つたという文面が見られる。高橋殿は曲水実弟の怒誰のことであり、曲水に断りもなく他人の同居を許すわけにはいかないと相談したのではないかとされることから、「受信者が江戸在住であることをうかがわせる」（田中善信『全釈芭蕉書簡集』）とされる。しかも四月八日というきわめて近い時期のことと推定されていることを考えると、曲水

は芭蕉入庵からほどなく江戸に赴いたと推察される。『花摘』の発句作者に曲水の名が掲げられる際、「近江」や「膳所」といった所書が添えられていないのも、江戸に現住することを示唆しているとみられる一端である。

さらに、六月三十日付の曲水宛書簡のなかで芭蕉は、あなたが江戸へ出発されて以後、しばらく大津に滞在し、そのあいだに幻住庵の損傷を繕ってもらいましたなどと報告している。文面からして、近隣のひとへ宛てたものとはとても考えられず、ならば、この時点でも曲水はなお在江戸を続けていたことになる。となると、前出の発句は、江戸滞在中の曲水が手ずから持参したか、だれかに届けさせたと考えざるをえない。四月中にすでに来府していたとすると、遅きに失したとすらいえよう。あるいは江戸に来た直後は公務に多忙を極めて、俳諧の旧知を訪ねるなど叶わなかったのかもしれない。

ただ、こうした曲水の動向を考慮しつつ「夏山や」の句を読んでみると、この「庵」とは幻住庵をさすという想定に心が動く。芭蕉が身を寄せる幻住庵を訪ねていく途中、まだ二曲がりも先のところに庵が目に入ると、はやく会いたくて気が急かれるといった意味が読み取れないだろうか。江戸出発前に一目会っておきたいと訪ねた、曲水の本心がうかがわれるではないか。も

ちろん、芭蕉の近況を其角に報じる意図も含まれていただろう。

曲水関係の記事は、六月十日にもみられる。

曲水の旅宿に訪て、湖水をおもひ出しに、

漣さざなみやあふみ表をたかむしろ 角

先日の曲水来訪（もしくは来簡）のお返しに、こんどは其角が相手の滞在先を訪ねたときの一句である。そこで詠じたのは、其角がかつて遊んだ琵琶湖を懐かしく思いだした作であった。当然ながら、故郷を離れている曲水の心情を思いやった句ともいえる。

つぎに見える曲水登場の記事は六月二十日のものだが、これはいささかようすが異なっている。

路通、つるがへおもひ立ける饞別に、
剃立かみだてのつむり哀や秋の風 曲水

これは『奥の細道』において、芭蕉が敦賀から大垣へと向かう場面、「露（路）通も此みなと（敦賀）まで出むかひて、みの、国へと伴ふ」につながる一句とみられる。路通という人物

は人となり問題を抱えていて、師の芭蕉から怒りを買うこともあったらしいが、元禄二年秋の時点では、単独旅行になる芭蕉に付き添う役目を果たすことになる。それを見送るにあたって、頭髮を剃り上げた路通の姿に哀愁を覚えたというのだ。

一句の意義はそれなりにあるとして、『花摘』のこの個所にとりして記録されたのが不可解である。同日の次句が路通なので、その関係かとも思われるものの、句は「床しさはいくつ角出_ス浜の芦」で、「秋の風」(秋)と「声の角」(春)という季語を含めて、内容的には関連性を見出しがたい。

七月七日は、其角・曲水を併せて、計八名の七夕・星祭・星合の発句が並べられている。あるいは其角亭で七夕の会が催されて、曲水も参加したかとみられる。

さらにその翌日、またもや曲水が登場する。

幻住庵山上

啄木とくまの柱をつゝく住居かな 曲水

直前に、同じ膳所藩士の里東が「仏餉(仏飯)」をもって、幻住庵の芭蕉を訪ねた折の句、「いつたきて落の葉盛の御仏餉ウツクぞも」が掲出されたのにちなんで、この曲水発句が出されたとも

考えられる。もしくは、曲水が里東の作を伴ってきたということもできる。七月八日という初秋の日付に、其角本人の句以外はすべて夏の十一句を出して見せており、曲水や里東の句が不調和なく配列されているとしてよい。いずれにせよ、曲水が其角亭を訪れてこうした発句を媒介にしつつ、懐かしい芭蕉の前年の動静をここで話題にしたとも想像される。

折から江戸に在勤する曲水とのやりとりを記録することを通じて、曲水という人物が、上方と江戸をつなぐ役目になうばかりか、過去の事象を現前させるキーマンにもなりおおせている。なにより、江戸を離れて久しい「翁」の消息を伝えてもくれるのだ。そうなると、本書がたんに其角個人の日常を述べる私的日記にとどまらず、蕉門全体の耳目をあつめる一書と期待されてもふしぎではないだろう。

東西の交流という点では、去来登場の仕方も看過できない。最初に顔を出すのは、五月朔日に見られる、「鶏のおかしがるらん雉のひな」の発句である。この直前に、芭蕉の「地ぢくふときけおそろし雉の声」があつて、おなじ雉の句が続くかたちで掲載される。次句も秋色の「雉の尾もやさしくさはる葦哉」というおなじ雉の句が来ており、この並びはとりたてて問題にはならないだろう。

目を見張らされるのは、これに続く作品の掲出である。「鼠説」と題され、「洛下／落柿舎去来稿」という署名のある俳文である。宝永三年（一七〇六）刊の許六編『本朝文選』に、「鼠賦」として収載されることになる。去来の本格的俳文の初稿にあたるものである。「鼠賦」と比べるとかなりの異同はあるものの、内容も文章も、さらには趣向もそれなりに出来上がった作品になりおせている。

周知のごとく、翌年刊の『猿蓑』は当初文章編（猿蓑文集）を設けることを目標として、それなりの準備が進んでいたとされる。その企画がいつから緒に就いたのかははっきりしないが、ここに初稿とはいえ、丸ごと掲出できたということは、去来はもとより、芭蕉の周辺では（猿蓑文集）実現に向けて始動していたことをうかがわせる。江戸の其角に披露してみせたというのは、それなりの手ごたえと自信を感じていたと想定することもできる。そう考えると、ここに全文が提示された意味は小さいとはいえないだろう。

さらに内容とは直接関わらないが、「鼠説」という標題の直下に、「卯月十八日の文の中に聞ゆ」と其角が書き添えていることも疎かにできない。すなわち、去来が江戸の其角に宛てて、これらの自作を送付した日付の明示だからである。四月十八日に

発送して、五月一日に其角の手許に到着したのだとすると、京・江戸間で十二日を要したことになる（四月は小の月）。これになるなら、東海道を二週間弱で届いたとみてよいことになる。

さて、『花摘』をもうすこしたとると、俳人去来を評するにあたって逸することのできない作品を目のあたりにすることになる。五月四日の条に一括掲載四十句中の、この一句である。⁽⁴⁾

一昨ワトシはあの山越ト、花盛シ、

去来

『去来抄』のなかに、この句について、芭蕉と去来との対話が収められる。そこでは、これがよまれたのは、「さるみの二、三年前」のことだとする。できた当初は、この句をただちに理解してくれるのではないだろうから、一、二年待たないといけないと言い、その後、杜国と吉野行脚した折、この句を毎日吟じながら歩いたものだという芭蕉談話がしるされている。それから次第に一般の人びとも理解してくれるようになっていったという。去来じしんは、芭蕉の先見の明に驚いたと白状している。

其角がこうした経緯を知ったうえで、自編の『花摘』に出したのかどうかはわからない。句の並びからみて、ごく直近に其角の耳に達した作ではなく、かなり前から温存していた一群の

発句のひとつとも推測される。制作直後には無理だとしても、数年後には共感をもって迎えられると予言した、まさにそのタイミングで『花摘』に披露されたことになる。京・江戸のあいだで、まるで阿吽の呼吸が通っていたかのようにもみられる事象であった。

ここまで『花摘』から透けて見える、其角を中心とした蕉門のあいだのさまざまなやりとりを取り上げてきた。つぎに、蕉門の真髓たる芭蕉の動向と作品が、本集にどう生かされているのかという本筋に立ち入るべきときがきた。

四 芭蕉と〈奥の細道〉

江戸にあった其角が多様な手段を通じて、関西をはじめとする諸国の俳人と連絡を取り合い、それが『花摘』に反映している一端を見てきた。とはいえ、ここまでの記述のなかで、肝心の人物の動向にほとんど目を向けてこなかった。それは言うまでもなく、〈芭蕉〉そのひとである。芭蕉をめぐる周辺の動きについては、垣間見程度に探ってきたが、当の本人が本書にどのような場を占めるのか、ほとんど触れてこなかった。其角をはじめとして、江戸をこえて、全国にちらばる蕉門の人びとに

って、いちばんの関心事だったはずである。ことに元禄二年秋に深川の庵を畳んで大旅行に出たきりの芭蕉が、どこにいてどんな活動をしているのか、知りたいと渴望していたと想像される。この章では、『花摘』からくみ取れる芭蕉の消息を中心に見てゆくこととする。

最初の登場は、四月二十七日のこの句である。

膳所へゆくとして、
翁かほろの祭見て来よ瀬田のおく

其角はみずからの撰集において、芭蕉を「翁」と称するようになるのは、元禄三年四月刊の『いつを昔』あたりからのようである。一般的に「翁」の号は、尊称・自称（卑称）の両用があるが、ここではもちろん芭蕉への尊敬もしくは敬愛の念をこめた表記としてよいだろう。⁽⁵⁾

さて、本句の解釈や意図についてさまざまな意見が交わされていて、定論に達していない感がある（『新芭蕉俳句大成』、二〇一四年明治書院刊）。詳説に及ぶことはさし控えるが、ここでは『花摘』から読みとれる範囲で解を試みることにする。

四月二十七日は、其角の「短夜や朝日待間の納屋まうまの声」のす

ぐあとに、本句が前書とともに掲出されており、当日はこの二句のみとなっている。其角の句との関連性は認めがたい。また、この句は「獺の祭」(獺祭)が季題となっている。『滑稽雑談』(正徳三年序)によると、「獺祭魚」の項目において、『礼記』の月令を引いて「孟春之月」としたうえで、獺の習性がもたらなった季題であることを解説する。さらに和文の説明文でも、「初春の季也」というように、一月の季語としている。

元禄三年の元旦を膳所で迎えた直後、芭蕉は三日に故郷の伊賀上野に赴き、三月中旬ころまで滞在する。となると、帰郷してからあまり間を置かないときの作とみてよいだろう。そうなれば、季題の時節とも齟齬はきたさない。ただし、「膳所へゆく」との「前書の意味するところが分明でない。命令口調の句柄からみても、膳所へ行くのは芭蕉じしんではありえない。となると、だれかの膳所行きを送別する際の作とも推測される。

このように発句制作の状況に不審な点があることは否めないながら、故郷伊賀に身を置きつつ、膳所という町をしきりに気づかっている芭蕉の心情がうかがえる一句である。ただしその句が、『花摘』四月二十七日の条に出された事情はわからない。いつ、どうした経緯で其角が知るところとなったのか、制作事情を承知していたのか、そしてなぜ日記のこの日付で掲載され

ることになったのか、不可解さはぬぐいきれないものがある。芭蕉が関わる俳諧作品の掲出に当たっては、比較にならないほど重要でありながら、いつそう理解しづらい記事がある。それは、先述の句の翌四月二十八日、其角の句に続けて、つぎのようにしるされるコメントである。

此日閑に飽て、翁行脚の折ふし、羽黒山於本坊興行の哥仙をひらく。

元禄二年六月にや。

そのあと、「有難や雪をめぐらす風の音」の芭蕉発句に始まって、以下八吟歌仙全巻が掲げられている。元禄七年成立の『奥の細道』本文には発句のみで、歌仙は紹介されていない。この歌仙は一般には、いわゆる「曾良書留」の記録で知られているものである。そこで「曾良書留」と突き合わせてみると、些少の異同を除いて、ほとんど違いは見られない(表記・仮名遣いは考慮外)。一座するメンバーも同一である。

もつとも目につく異同は発句に認められる。本書では中七・下五の「雪をめぐらす風の音」が、「書留」では「雪をかほらす風の音」となっている。ちなみに、これに関して言うならば、

『奥の細道』所載の発句では「雪をかほらす南谷」となっていて、一概に本書の句形が間違いとは決めつけられない。^⑦

歌仙のあと、さらに羽黒山での芭蕉発句が掲載される。

湯殿

語られぬゆどのにぬる、袂哉 翁

月山

雲の峯いくつ崩れて月の山 同

この二句は、『奥の細道』でもこのままのかたちで見ることが出来る。

それにしても、其角はこれらの作品にいかにか接することができるのか、改めて問われるべき疑問となってくる。もちろん、芭蕉あるいは同行の曾良から報じられたと推測することも可能である。じつは、まさにこの四月に上梓したばかりの『いつを昔』でも、みちのく道中の芭蕉作をすでに紹介していた。金沢でよんだ「わせの香や分入^ル右はありそうみ」の句である。このときの入手方法も不明なのだが、もし奥州旅行で詠んだ芭蕉の全作を知り得ていたのだとすると、元禄三年四月刊の『いつを昔』の時点で出してもよかったはずである。

ここでまた注意されるべきは、釣雪の存在である。じつは先掲の「雲の峯」の句の続きに、以下の記事が来ているのだ。

同じ山行

鶯の声賤しさよ夏の雪

観修坊 釣雪

四月九日に露丸の発句を江戸に届けたかと目される釣雪の再登場である。この前書は、芭蕉発句の「月山」を受けているのはまちがいない。芭蕉翁が三山に登って、この句を詠じられたとき、わたしも一緒にしたのです、と伝えていることになる。釣雪の句は「曾良書留」では確認できないので、確証はないのだが、おそらく元禄二年六月時点の作とみてよいだろう。羽黒山での「有難や」歌仙でも釣雪は一座しており、発句のみならず、歌仙を其角に報じられる立場にあつたとしてよいだろう。

もうひとり、其角に情報提供できそうな人物として、芭蕉の旅に同行した曾良が考えられる。曾良は元禄二年十一月には江戸に来ており、元禄四年三月ころまで滞在している（石川真弘『蕉門俳人年譜集』『河合曾良年譜』）。そして『いつを昔』にも一句入集させており、其角との交流があつたことをうかがわせる。ところが、つぎの『花摘』には曾良の名前はどこにも見出

すことができず、奥州紀行情報の直接提供者とは考えにくい。

以上のような推測が認められるならば、其角が二十日ほど以前に釣雪から手渡されていた芭蕉らの吟詠を必要に応じてひもとき、ここで披露してみせたということになる。「元禄二年六月にや」という心もとない書き方になったのも、釣雪から聞かされていた時日をかろうじて思いだしたといったテイにもみられる。其角にとつては、芭蕉と別れて一年以上にもなる翁の貴重な俳諧に親近する、絶好の機会となったにちがいない。其角一人にとどまらず、江戸の仲間たちにとつても垂涎的となったことだろう。

芭蕉に限らず、多彩な俳人の作品や動向情報を手に入れながら、必ずしも当日に記載することなく、幾分か間を置いたところで報告してみせる。しかし、その機運の見定めにも必然性があるようにみられない。むしろあえて当日性を無視するところに、かえって周辺の臨場感を際立たせる効果を發揮するのに寄与しているようでもある。そこにこそ、俳諧撰集としては異例なかたちの『花摘』の最大の特色があるとみてよいだろう。

おわりに

基本的に日記という体裁をもった『花摘』は、撰集としてはきわめて特異なすがたをしていると言わざるをえない。にもかかわらず、全国に広がりつつある蕉門を包み込むほどの懐の深さを有している。そのような微妙なバランスを保って世間に向けて発信することができたのは、余人を以て替えがたい其角の器量・才覚あつてのことだろう。

このような全体像を凝縮した一節が、五月四日のところに見てとることができる。「雨ふりて人の来たりける日書次」としたうえで、計四十句が列挙される。春夏秋冬の各季節それぞれ十句ずつという入集ぶりである。七句もの芭蕉発句が見られるのも驚きであるが、去来・尚白・加生（凡兆）・路通・珍夕などといった各地の蕉門俳人が顔を見せるのも注目される。さらに、芭蕉発句でいうと、貞享四年から当年までの作が含まれている。この部分に限っていうと、日記の体裁を棄てて、いわば撰集のミニ版といった様相を見せている。

末尾にはこんな添え書きが見られる。

右四十句、誹番匠之墨糟也。仍テ駈ニ入競一馬之埒ニ畢。

「誹番匠」は、四月に上梓したばかりの『いつを昔』をさしている。そこへ入集するはずの句を、何らかの事情で入れ損ねたということなのか。後半は、六月四日によんだ其角の発句「競馬^{うまご}崎^{まき}に入身のいさみ哉」にひっかけて、この日の枠に収めることにした、といった意味だろう。『いつを昔』も定型の四季類題集の形態をとらないが、『花摘』ともまったく趣向を異にしている。むしろ和歌の撰集方式を踏襲するかのような姿勢をとっている。いずれにしろ、やはり斬新な俳諧撰集をねらった一集といてよい。各集の独自性を備えつつも、また同時に双方の関連性をうかがうこともできる。一集ごとの新様式と撰集の普遍的俳諧性という、両様を模索しているかともおもわれる。

「はじめに」で触れたように、『花摘』の出来映えについて、前集の『いつを昔』以上に、芭蕉は大きな期待をかけていたようである。確信にちかい手ごたえを懐いていたのではないだろうか。その期待感は、つぎに上方で実現しようとしている撰集への手がかりになる可能性もある。それこそ、翌年の『猿蓑』にほかならない。去来^{きょらい}の俳文「鼠説」の試作の収録や、諸国にまたがる蕉門俳人への目配りなど、其角の編集手腕は一目を置かれてもよいものだった。俳諧の歴史上最高峰と目される『猿蓑』を分析・評価するうえで、『花摘』は無視できない撰集と

いうことができるだろう。

〔注〕

(1) 『宗祇日次発句』（綿屋文庫。れ32―5）のこの日の条に、「水無月／名にしあふ水なし月の雨もなし」（異文の掲出あるも略す）の句があがる。其角の「河簀垣」の句が無季であるところ、宗祇の当該句をもって「水無月」の季をあてがう意図があったか。

(2) 芭蕉の「有難や雪をかほらす風の音」を立句とする歌仙に釣雪も一座、その全巻が『花摘』に収録。第四章参照。

(3) この推測が妥当とするならば、陰曆四月の花とされる桐の花の当句は、よほど手早く詠じられ、また其角へ伝えられたことになる。

(4) これも四月十八日付の通信に同封されていたのかもしれない。

(5) 『日本国語大辞典』第二版に、「老人を親しみ呼ぶ語。とくに、俳諧の世界では、松尾芭蕉をさしている」とあるが、むしろ「敬って呼ぶ語」とすべきだろう。

(6) 『泊船集』に「洒堂餞別」の書入があるが、疑問視されている。

- (7) 初折裏の五句目「歌よみの跡したひ行家なくて」(釣雪)の下五が、「書留」では「宿なくて」となっている。
- (8) 嵐雪の『其袋』にも、越後から敦賀にかけての北陸でよんだ、いくつかの芭蕉発句が所載されるが、入手ルートはおなじだったかもしれない。
- (9) 撰集『いつを昔』については、拙稿「其角『いつを昔』の舞台裏」(大阪俳文学研究会会報『俳文学報』第47号参照)。

(ふじた しんいち／本学教授)